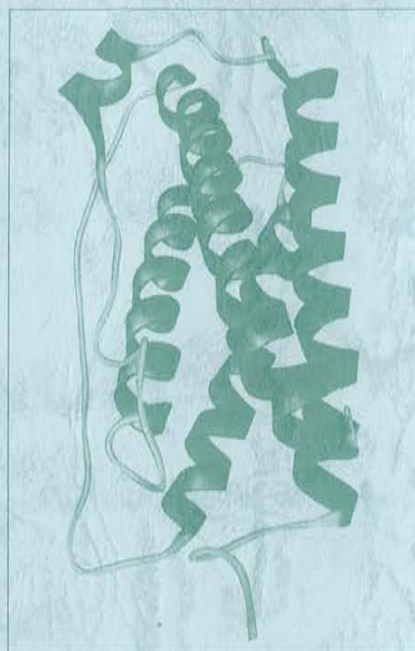


財団年報

平成 17 年度

Annual Report 2005



(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

Kato Memorial Bioscience Foundation

財団年報

平成 17 年度

Annual Report 2005

(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

Kato Memorial Bioscience Foundation

目 次

はじめに	1
I. 平成17年度事業報告	
1. 年間の経緯	2
2. 助成事業	
(1) 第17回研究助成	3
(2) 第17回国際交流助成	3
(3) 第16回学会等開催助成	9
3. 研究助成贈呈式	11
4. 第22回加藤記念公開シンポジウム	
(1) 開催にあたって	16
(2) 講演プログラム	18
5. スナップ写真	19
6. 平成17年度収支決算報告	23
II. 平成18年度事業計画	
1. 助成事業 研究助成、国際交流助成、学会等開催助成	24
2. 平成18年度事業予算	25
III. 助成金受領者からの報告	
1. 研究助成	26
2. 国際交流助成	57
IV. 財団の運営と組織	
1. 設立趣意	93
2. 目 的	94
3. 事 業	94
4. 組 織	94
5. 財団の概要	95
6. 平成18年度財団役員、評議員及び選考委員	97
編集後記	99

はじめに

理事長 平田 正

平成17年度(2005)を振り返ってみると、わが国の少子高齢化が一段と進行し予測より早く人口減という大きなターニングポイントを迎えました。資源の乏しいわが国が「科学技術創造立国」を国家の基本戦略として知の国際競争を勝ち抜いて行く上で、まさに百年の計と言っても過言ではない少子化対策と人材立国の実現に向け、その取り組みが問われようとしています。

また、当財団にとっても平成17年度は理事・評議員の先生から成る企画委員会を昨年5月に設置し、財団事業の在り方について財団創設時の原点に立ち返り諸事業の見直し・検討を行ったところです。特に「研究助成の在り方」については民間財団の特徴となるようメディカルサイエンス分野と並びバイオテクノロジー分野にも光を当てる為に、両分野を区分して募集することや、「研究助成」の他に、バイオテクノロジー分野に「奨励研究助成」を新たに設定し、領域を指定して募集すること、また、ハンディキャップのある女性研究者の応募年齢の拡大、女性選考委員の選任などを含む大幅な募集要項の改訂を行い、平成18年度から実施の運びとなりました。ご尽力頂きました企画委員会の先生方や財団の理事・評議員の先生方に改めて御礼申し上げたいと存じます。

このように平成17年度は財団の変革へ向けた年でありましたが、平成17年度の活動は従前通り「若手研究者による独創的・先駆的研究」を助成するという趣旨で研究助成事業をはじめ各事業を順調に遂行しえたものと思っております。

先ず、財団事業の大きな柱である研究助成については、バイオサイエンスの各分野でご研鑽を積まれている23名の方々に総額4,600万円を、国際交流助成は30名の方々に合計740万円を、学会等開催助成には5件で100万円を助成することが出来、助成総額5,440万円となりました。また、加藤記念公開シンポジウムでは、いまや国民病といわれる「花粉症」を取り上げ、免疫、アレルギー、発症、治療等に関わる基礎あるいは臨床の最先端を行く専門家の研究をご紹介します。各分野から多数の方々のご参加を頂くことが出来ました。

平成17年度は財団理事・評議員の改選はない年でしたが、6月に新選考委員の先生方7名が選任されました。いずれの方々もそれぞれの分野で先駆的な研究をされており、当財団にとっても誇らしく感じています。

平成18年度の活動は既に始まっていますが、国内経済環境はデフレ経済から脱却し好転しつつありますが、人類の抱える課題は人口、水、食料、環境、エネルギー、資源、感染症、生活習慣病、癌等々途方もなく大きな広がりを見せています。今後とも出捐者であります協和発酵工業(株)からのご寄付を有効に活用し、「萌芽的あるいは先駆的研究に注目し、研究助成を続ける」という当財団の理念に則り、特にバイオサイエンスの発展を担われる若手研究者や女性研究者の支援に繋がるよう諸事業を推進致す所存ですので、関係各位様のご指導・ご支援を切にお願い申し上げます。

I. 平成17年度事業報告

1. 年間の経緯 (平成17年4月～平成18年3月)

平成17年

- 5月10日 第1回企画委員会 学士会分館
- 6月 3日 財団パンフレット更新
- 6月 3日 第34回理事会・評議員会 経団連会館
平成16年度事業報告及び収支決算承認
- 6月23日 第17回国際交流助成(前期)候補者選考会 学士会分館
- 7月 5日 第2回企画委員会 学士会分館
- 7月上旬 第22回公開シンポジウムポスター発送開始
- 8月 1日 財団年報第6号(平成16年度)刊行
- 9月20日 第17回国際交流助成(後期)候補者選考会 学士会分館
- 9月20日 第3回企画委員会 学士会分館
- 9月30日 第17回研究助成募集締め切り
- 10月15日 第22回加藤記念公開シンポジウム
「スギ花粉症—機序解明から新しい治療へ—」 経団連ホール
- 10月25日 第4回企画委員会 学士会分館
- 12月15日 第5回企画委員会 経団連会館
- 12月21日 第17回研究助成候補者選考委員会 経団連会館
研究助成候補者 23名選考

平成18年

- 2月 3日 第35回理事会・評議員会 経団連会館
平成18年度事業計画および収支予算承認
第17回研究助成対象者承認

- 3月 3日 第17回研究助成贈呈式 如水会館

- 通年 第16回学会等開催助成は5件に対して実施

2. 助成事業

第33回理事会・評議員会(平成17年2月4日)にて決定された平成17年度事業計画に則り、助成事業として研究助成、国際交流(海外派遣)助成及び学会等の開催助成を実施した。各助成における応募状況と採択率等を下表に示した。

事業名	推薦または申請件数	助成件数	採択率(%)	予算総額(万円)	実績(万円)
研究助成	102	23	22.5	4400	4600
国際交流助成	64	30	46.9	750	740
(前期)	49	22	44.9	580	565
(後期)	15	8	53.3	170	175
学会等の開催助成	5	5	100	100	100

(1) 第17回(2005年度)研究助成

平成17年度は総額4,400万円(一人200万円22名)の予算を組み、推薦依頼先リストBグループの大学及び公的研究機関241の研究機関の長、当財団の理事(13名)及び評議員(15名)の合計269名に候補者の推薦を依頼した。応募件数102件につき選考委員会(平成17年12月21日開催)において厳正な審査により、研究助成候補者23名及び補欠1名が選出された。ついで、平成18年2月3日(金)に開催された第35回理事会・評議員会にて研究助成対象者23名が決定され、平成18年3月3日(金)に研究助成贈呈式が如水会館で施行された。贈呈式では、1件当たり200万円の助成金目録及び記念の盾を贈呈した。

助成対象者氏名・所属、研究題目を表1に示す。

(2) 第17回(2005年度)国際交流助成

平成17年度の国際交流助成は例年通り雑誌等のメディアを通し公募した。前期(平成17年5月末締切)応募者49名、後期(平成17年8月末締切)応募者15名につき選考委員会にて助成候補者が選考され、前期22名(助成金額合計565万円)、後期8名(助成金額合計175万円)の合計30名(740万円)が理事長及び評議員会議長の承認後助成された。

助成対象者氏名・所属・発表学会等を表2・表3に示す。

表1. 第17回加藤記念研究助成対象者

氏名	所属	職名	研究題目
池田 弘	福井大学工学部知能システム工学科 生体システム研究室	講師	単一細胞イメージングシステムによる慢性痛メカニズムの解明
井上 裕介	群馬大学工学部生物化学工学科 生物機能工学講座	助教授	肝臓特異的 HNF4 α ノックアウトマウスにおける鉄代謝異常の分子機構の解明
入江 賢児	筑波大学大学院 人間総合科学研究科	教授	細胞の多様性を生み出す非対称分裂の制御機構
岩崎 憲治	大阪大学蛋白質研究所附属プロテオミクス総合研究センター	助教授	電子線トモグラフィーを使用した細胞内分子の三次元可視化
内田 毅	北海道大学大学院理学研究科 化学専攻構造化学教室	助手	センサータンパク質をベースとした脳内シグナル分子観測システムの構築
梶川 正樹	東京工業大学大学院生命理工学研究科	助手	転移因子 LINE の転移制御機構に関する研究
菊地 和也	大阪大学大学院工学研究科生命先端工学専攻	教授	生きたままの機能解析を可能とする設計センサー分子
小柴 琢己	九州大学大学院理学研究院生物科学部門	助教授	リポ多糖認識に伴う生体膜融合及び感染防御機構の分子基盤解析
小谷 英治	京都工芸繊維大学繊維学部応用生物学科	助手	昆虫細胞・個体内での効率的タンパク質発現に向けた RNA 結合タンパク質の人為操作
小林 隆志	九州大学生体防御医学研究所免疫制御学分野	助手	制御性樹状細胞による免疫抑制の分子機構の解明
駒田 雅之	東京工業大学大学院生命理工学研究科	助教授	脱コビキチン化による増殖因子受容体ダウンレギュレーションの調節機構
斎藤 通紀	理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター	チームリーダー	Blimp1 (Prdm1) と PrdmX による生殖細胞形成機序の解明とその再構成
佐藤 貴弘	久留米大学分子生命科学研究所 遺伝情報研究部門	助手	視床下部におけるグレリンの分泌調節機構の解明
武田 憲彦	東京大学大学院医学系研究科循環器内科	医員	時間治療への応用を目的として循環器疾患における体内時計の役割を解明する

田中 健	東京農工大学大学院工学教育部 応用分子化学科	助教授	触媒的不斉[4+2]付加環化反応による光学活性ラクトンの合成
中山 二郎	九州大学大学院農学研究院生物 機能科学部門微生物工学研究室	助教授	グラム陽性菌のクォーラムセンシングを標的とした新奇抗感染症剤の創製
畠山 鎮次	北海道大学大学院医学研究科 生体機能学専攻分子生化学講座	教授	人工ハイブリッド型ユビキチン化酵素による癌治療法の開発
服部 光治	名古屋市立大学大学院薬学研究科 科病態生化学分野	独立 助教授	大脳の神経細胞層形成を司る分子機構
檜枝 美紀	愛媛大学医学部生化学分子遺伝学	特任 助手	HB-EGF カルボキシル末端ペプチド断片による新規シグナル伝達経路の解析
松崎 仁美	筑波大学大学院 生命環境科学研究科	COE 博士 研究員	YAC 遺伝子導入マウスを用いたゲノミック・インプリンティング確立機構の解析
水島 昇	東京都臨床医学総合研究所タンパク質代謝プロジェクト	副参事 研究員	哺乳類オートファジーの制御因子の解析
矢部 富雄	岐阜大学応用生物科学部応用生命科学講座	助手	食品多糖類の新規生理機能を探索するための基礎研究
渡部 徹郎	東京大学大学院 医学系研究科 分子病理学講座	助手	血管内皮細胞から血管平滑筋・リンパ管内皮細胞へ分化を調節する分子機構の解明

表2. 第17回加藤記念国際交流助成(前期)対象者

	氏名	所属	参加学会	開催地	助成金額 (万円)
1	浅岡 洋一	東京大学大学院理学系研究科生物化学	ヨーロッパ松果体・生物リズム学会	ドイツ	30
2	上野 博司	京都府立医科大学麻酔学教室	ヨーロッパ麻酔学会	オーストリア	30
3	梅名 泰史	京都大学原子炉実験所粒子線基礎物性研究部門	第20回結晶学国際会議	イタリア	30
4	大石由美子	東京大学大学院医学系研究科循環器内科	欧州内分泌学会	スウェーデン	30
5	緒方 久修	九州大学大学院医学研究院病態機能内科	米国消化器病週間	シカゴ	25
6	小川 数馬	金沢大学学際科学実験センター	米国核医学会	カナダ	25
7	香川 聡	森林総合研究所組織材質研究室	ヨーロッパにおける年輪年代学、気候学に関係した国際会議	イタリア	30
8	片野坂友紀	国立循環器病センター研究所	国際心臓研究会	ノルウェー	30
9	角野 貴志	北九州市立大学大学院国際環境工学研究科	第2回植物・微生物の環境と代謝の生化学に関する国際ワークショップ	中国	15
10	金澤 伸雄	京都大学大学院医学研究科皮膚生命科学	第35回ヨーロッパ研究皮膚科学会	ドイツ	30
11	金森 紀仁	食品総合研究所食品工学部	植物生物学会2005	シアトル	20
12	木村聡一郎	東邦大学医学部微生物・感染症学講座	インターサイエンス化学療法学会	ルイジアナ	25
13	黒田 誠	筑波大学大学院人間総合科学研究科	米国微生物学会	ジョージア	25
14	黒田 裕樹	静岡大学教育学部理科教育講座	第15回国際発生生物学会	オーストラリア	20
15	佐々木和教	東北大学大学院生命科学研究所	細胞性粘菌国際会議2005	フランス	30
16	月原多佳久	京都大学生存圏研究所バイオマス変換分野	日米菌学会合同大会	ハワイ	15
17	堂上 友紀	明治鍼灸大学附属病院内科	北米核医学会	カナダ	25

18	松原 雄	京都大学医学部附属病院 腎臓内科	アメリカ糖尿病学会	カリフォル ニア	20
19	水品 善之	神戸学院大学栄養学部	2005コールド・スプリング・ハーバー 真核生物 DNA 複製会議	ニュー ヨーク	25
20	盛岡(柗原) 恵子	広島大学大学院理学研究 科植物分類・生態学	コケ植物の発生生物学、生理学、分 子生物学に関する国際会議	チェコ	30
21	吉村 弥生	北海道大学大学院生命科 学院	第18回複合糖質国際シンポジウム	イタリア	30
22	吉岡 資郎	自然科学研究機構岡崎統 合バイオサイエンスセンター	第12回生物無機化学国際会議	ミシガン	25

表3. 第17回加藤記念国際交流助成(後期)対象者

	氏名	所属	参加学会	開催地	助成金額 (万円)
1	金蔵孝介	慶應義塾大学医学部薬理学教室	第35回北米神経科学会	ワシントン DC	25
2	黒川洵子	東京医科歯科大学難治疾患研究所生体情報薬理学	50回米国生物物理学会年会	ユタ	20
3	近藤慎一	宮崎大学医学部解剖学講座分子細胞生物学	第35回北米神経科学会	ワシントン DC	25
4	定本久世	徳島文理大学香川薬学部創薬学科	第35回北米神経科学会	ワシントン DC	25
5	柴田幹大	名古屋工業大学大学院工学研究科物質工学	2005環太平洋国際化学会議	ハワイ	15
6	松本理器	京都大学大学院医学研究科脳病態生理学神経内科	第35回北米神経科学会	ワシントン DC	25
7	矢野知美	九州大学大学院生物資源環境科学府	2005環太平洋国際化学会議	ハワイ	15
8	山田真吏奈	慶應義塾大学医学部解剖学教室	第35回北米神経科学会	ワシントン DC	25

(3) 第16回(2005年度)学会等の開催助成

平成17年度開催分の5件の学会等に対して、選考委員長及び理事長・評議員会議長の承認を得て、助成金額を1件20万円とし合計100万円の助成を実施した。学会名等は下記の通りである。

1. 日本色素細胞学会第19回年次学術大会

開催日 : 2005年12月3日～4日
場 所 : 慶応義塾大学日吉キャンパス
申請者 : 秋山 豊子
推薦者 : 西川 伸一 (財団評議員)
参加者 : 海外(5名)、国内(230名)

2. 第6回国際胃癌学会

開催日 : 2005年5月4日～7日
場 所 : パシフィコ横浜
申請者 : 北島 政樹
推薦者 : 菅野 晴夫 理事(財団名誉理事)
参加者 : 海外(400名)、国内(900名)

3. 第28回日本神経科学大会

開催日 : 2005年7月26日～28日
場 所 : 横浜国際平和会議場
申請者 : 宮下 保司
推薦者 : 三品 昌美 (財団評議員)
参加者 : 海外(300名)、国内(2000名)

4. 第20回国際生化学・分子生物学会議

開催日 : 2006年6月18日～23日
場 所 : 国立京都国際会館
申請者 : 上代 淑人
推薦者 : 別府 輝彦 (財団理事)
参加者 : 海外(3000名)、国内(6000名)

5. 第11回国際純正応用化学連合(IUPAC)農薬化学国際会議

開催日 : 2006年8月6日～11日

場 所 : 神戸国際会議場

申請者 : 大川 秀郎

推薦者 : 森 謙治 (財団理事)

参加者 : 海外(450名)、国内(550名)

3. 研究助成贈呈式

第17回加藤記念研究助成贈呈式は、平成18年3月3日(金)15時から如水会館(千代田区一ツ橋)において受領者(23名出席)、財団関係者・来賓他ほぼ70名の参加のもとに開催された。

式次第としては理事長挨拶、長澤選考委員長の選考経過報告に続いて、理事長から受領者一人一人に助成金目録および記念盾が授与された。引き続き文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長松尾泰樹氏から祝辞が述べられ、その後助成金受領者全員から助成対象となった研究計画の発表に移った。

一人4分の持ち時間であったが、それぞれ研究の背景、計画、成果への期待など良く準備された説明で好評であった。

主な出席者(敬称略):松尾泰樹(文部科学省・ライフサイエンス課課長)、松田 譲(協和発酵・社長)、高橋 充(協和発酵・執行役員)

財団関係者:木下祝郎(名誉会長)、松井正直(名誉理事)、早石 修(名誉理事)、池原森男(名誉理事)、平田 正(理事長)、土井内徹(常務理事)、森 謙治(理事)、小田鈎一郎(理事)、北原 武(評議員)、木村 光(評議員)、中野洋文(評議員)、長澤寛道(選考委員長)、内海成(選考委員)、依田幸司(選考委員)、奈良 高(財団 0B、以下同様)古屋 晃、岡 徹夫、小室敏雄、白幡公勝

(1) 理事長挨拶

理事長 平田 正

本日は皆様には大変お忙しい中、第17回加藤記念研究助成贈呈式に多数ご出席賜り誠に有難うございます。

なお、本日は当財団の主務官庁でございます文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長の松尾泰樹様にもご臨席頂いております。松尾様、お忙しいところ有難うございます。

贈呈式を始めるにあたりまして理事長として一言ご挨拶申し上げます。

加藤記念バイオサイエンス研究振興財団は、協和発酵工業株式会社の創立者でありました加藤辨三郎博士の「バイオサイエンスを通じて社会の発展に寄与したい」と言う強い念願を実現すべく、協和発酵の創立40周年を記念いたしまして1988年—昭和63年12月に設立された財団でございます。

爾来当財団は、「サイエンスの発展には創造的な若い頭脳に期待することが大切である」との認識から「独創的な若手研究者への研究助成」をわが国のバイオサイエンスの発展に最も重要な事業として位置付けて参りました。若手研究者への研究助成および国際交流助成がそれであります。

皆様、ご承知の通り資源の乏しいわが国は、科学技術の振興なくして21世紀の日本の発展はないとの認識から、科学技術創造立国を国家の基幹戦略として標榜し、科学技術基本法の制定下、平成8年度から科学技術基本計画に基づき様々な施策が精力的に推進されて来ました。昨年12月末には、「科学技術に関する基本政策について」総合科学技術会議より小泉首相に答申され、平成18年度から始まる第3期科学技術基本計画が策定されようとしています。

知の世界的競争が果てしなく激化する中で、イノベーションー技術革新をどのようにして実現していくか、また、社会や国民に得られた成果を還元し、その帰結として在るべき日本の姿が求められようとしています。この為、投資的視点に立ち個人重視の人材育成への明確な政策転換、さらに向こう5年間で25兆円という巨額の投資目標額も設定されたと聞いています。

このような環境下に在って、当財団の研究助成金額は微々たるものですが、バイオサイエンスの研究分野におきまして、この助成活動を継続することにより、いささかでも若い研究者の独創的な研究をご支援したいと考えておる訳であります。

幸い当財団は協和発酵工業株式会社から毎年多大なご支援を戴き、それによって本年度も継続的に研究助成事業を行うことが出来ました。皆様方のご尽力により当財団の評価も着実に高まってまいりまして、若手研究者の助成事業には例年多数の応募を頂いております。その結果、今年度は国際交流助成では64名の応募に対し30名の方に総額740万円、学会等の開催助成は5件、100万円を助成いたしております。本日の研究助成では、102名の応募に対し23名の方々に記念の盾と総額4,600万円の助成金を贈呈いたします。

本日助成を受けられます皆様方の研究が、皆様の創意と情熱により、10年後、20年後には果実を結び、わが国のバイオサイエンスの進歩、ひいては日本の産業の礎にまで発展されますように切に祈念致しております。

ご臨席の皆様にも助成を受けられます若き研究者の今後の発展を祈念して励ましのお言葉をお掛け頂ければ幸いに存じます。

本研究助成の選考に当たられました選考委員長長の長澤寛道先生はじめ18名の選考委員の諸先生に感謝申し上げます。

また、本日ご臨席の皆様には、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団に対しまして今後とも一層のご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。私のご挨拶とさせていただきます。どうも有り難うございました。

これで私のご挨拶は終わりと致しますが、この機会を借りましてもう少し付言させていただきますと、今年は2006年でございまして、丁度50年前、バイオサイエンス、バイオテクノロジーの分野で日本発の大変画期的な発明・発見、技術開発の成果が発表されて世界を驚かせた訳でございます。今日は正に皆様方の受賞をお祝いするこれ以上無い二つの偉大な功績を成されたお二方

にご臨席を頂いております。お一人は世界で初めてアミノ酸の醗酵技術の発明、これを率いられました木下祝郎博士でございます。ご承知のように微生物が生命維持に必須のアミノ酸を体外に著量出すということは常識的には考えられなかった訳です。微生物の代謝をコントロールすることによってグルタミン酸をはじめとしたアミノ酸の代謝制御醗酵を次々に確立し、単なる醗酵工業の進展ばかりでなく、その後の遺伝子組み換えや所謂ニューバイオテクノロジーの大きな流れに繋がった技術の開発でございます。木下博士、お立ち頂いて皆さんにお顔をお見せ頂けますでしょうか。木下祝郎博士でございます。当財団の名誉会長もして頂いております。お二人目は1955年にJACSに発表されました酸素添加酵素、所謂オキシゲネースを発見されました早石修先生でございます。私の理解では、その時まで生物内の酸化というのは、水分子から水素を引き抜いて酸化するという仕組みだけが知られていましたが、分子状の酸素が例えばトリプトファンに取り込まれてその後の非常に重要な生理機能に基づく代謝パスウェイに繋がるということを確認された訳です。正に教科書を変えられる大きな発見でありました。先生の偉大な業績はその後の生理化学というか薬理化学の非常に大きな流れに繋がった訳でございます。早石先生お立ち頂けますでしょうか。早石修先生でございます。早石先生も当財団の名誉理事をお務め頂いております。本当に有難うございます。

受賞される皆さんの研究成果も大きな流れの源泉になりますことを祈念して私の挨拶とさせて頂きます。有難うございます。

(2) 選考経過報告

選考委員長 長澤 寛道

ただいまご紹介頂きました、選考委員長を務めさせて頂いております、東京大学大学院農学生命科学研究科の長澤寛道と申します。

本年度の研究助成の申請は102件ありました。この数は昨年より少し少ない数であります。この102件につきまして、18名の生命科学系の各分野の専門の先生方にまず第1段階として、書面審査して頂き、次に第2段階目として昨年の12月21日に経団連会館で一堂に会して1件ずつ検討させて頂きました。その結果、23件を選んだわけではありますが、本来は予算枠から言いますと、22件分の枠しかありません。財団側の格別のご配慮で少し分野の異なる1件を追加することを許して頂きました。本年度の研究助成から、応募要領には女性研究者の応募を特に歓迎する旨の記載がありましたが、最終的には23名中の2名にとどまりました。このようにして23件を選ばせて頂きましたので、約5倍の競争率ということになりました。

本年度の審査経過の特徴は、最終的に選ばれました申請課題のほとんどが意見が割れずに、高い評価が与えられたことです。例年ですと、ある審査委員が高い評価を与えても、他の審査委員が低い評価しか与えないという場合がよくありましたが、本年度はそういう例が少なく比較的スムーズに選考することが出来ました。したがって、本年度選ばれた方は異論なく高い評価を得られ

たものと思いますので、自信を持って研究計画を実現してほしいと思っております。

選考のポイントは、先端性、独創性はもちろんでありますが、文部科学省の科学研究費の助成の選考とは少し異なりまして、研究室を新たに立ち上げようとしている方や分野や地域の偏りをなくすことにも配慮しました。また、先ほども述べましたように、女性研究者への支援ということも考慮させて頂きました。

本財団の助成金額は、他の財団の研究費に比べますと多い部類に属すると思います。しかも、予算の執行に関して高い自由度がありますので、有効に活用されてご自身の研究の発展に役立てて頂くのが最もよいと考えています。このような条件は研究者にとって極めてありがたいもので、それを可能にしてくださっている加藤記念バイオサイエンス研究振興財団に敬意を表するとともに、皆様の研究の発展を祈念しまして、選考経過の報告とさせていただきます。

(3) 祝 辞

文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長 松尾 泰樹

はじめに、本日、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団から、研究助成金の贈呈を受けられる研究者の皆様方に心よりお祝い申し上げます。

21世紀は生命科学の世紀と言われております。近年その発展はめざましく、平成15年4月のヒトゲノムの完全解読により、今や我々は、我々がヒトとなるための設計図の全貌を手に入れました。生命科学はポストゲノムシーケンスの時代へと突入り、世界的にも最重要科学技術分野として激的な研究開発競争がくり広げられています。

この競争により生み出される膨大な知見と技術は、人類が直面する困難を解決する有効な手段を与えてくれると期待しております。特に、急速な少子高齢化が進む我が国においては、健康で活力に満ちた社会を実現する上で、ライフサイエンス研究の振興は極めて重要な課題であります。

政府としても、ライフサイエンスを第2期科学技術基本計画の重点4分野の一つとして位置づけると共に、平成14年12月に内閣総理大臣主宰の「バイオテクノロジー戦略会議」において「BT（バイオテクノロジー）戦略大綱」を策定し、政府全体としてライフサイエンス分野の研究開発を戦略的に推進してまいりました。第3期科学技術基本計画においても、引き続き重点推進分野と位置付けられる方向で、検討が進んでおります。

また、文部科学省におきましても、ヒトゲノム研究をはじめ、幅広く生命科学の研究を進めることにより、各種疾病の解明や革新的な医療の実現に向け積極的に取り組むとともに、科学研究費補助金等の競争的資金の大幅な増額により、基礎研究の振興に努めております。

このような状況の中で、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団におかれましては、バイオサイエンス分野を対象として、研究者個人個人の真の独創性を支援する研究助成事業を行ってこられました。政府の取り組みのみならず、民間の御発意によるこのような取り組みによって、科学技

術の振興のより深い基盤が作られることは、欧米の例を見ても明らかであります。貴財団の活動が、我が国の科学技術の発展に多大なる貢献をしていることは明らかでありまして、貴財団が担ってこられた役割に、改めて深く敬意を表したいと思えます。

本日、研究助成金を贈呈された研究者の皆様におかれましては、我が国における科学技術の振興が、21世紀の我が国にとって極めて重要であることを改めて認識し、一層のご精進により、研究に励まれることをお願いするとともに、財団の今後の一層の発展を祈念いたしまして、わたしからの祝辞とさせていただきます。

平成18年3月3日

(4) 祝賀パーティ

贈呈式が滞りなく終了し、助成金受領者と財団関係者の記念撮影後、17時30分から祝賀パーティの開催となった(如水会館・ペガサスの間)。

最初に当財団の出捐者である協和発酵工業(株)代表取締役社長松田譲氏のご挨拶を頂戴した。松田社長は、「今年はアミノ酸の発酵法による工業生産、および酸素添加酵素の発明・発見が行われてから丁度50年目にあたり、皆さんは記念すべき年に受賞された。私からも皆さんの受賞に花を添えるエピソードを一つ紹介したい。数日前の朝日新聞に、論文が世界の科学ジャーナルに最も多く引用された世界一の研究者は、大阪大学の審良静男教授であるとのニュースが掲載されておりますが、その審良先生こそが、当助成金の第一回目の受賞者のお一人です。この記念すべき第一回目の受賞者の中には、他にオーダーメイド医療の研究で有名な東大の中村祐輔教授も含まれております。2回目以降の受賞者リストを改めて眺めて見ますと、現在国際的に御活躍されているたくさんのお著名な先生方が含まれており、その数の多さに気づかされます。今回受賞された皆さんも、この価値ある賞を戴いたということを誇りとして、また自信をもって今後の研究活動に励んでいただきたいと思います。」とのメッセージが伝えられました。

続いて、当財団の小田鈎一郎理事から、助成金受領者に対してお祝いのお言葉と共にオリンピックと同様に日本の代表者として国際的に通用する研究に励んで頂きたいとのエールが贈られ、高らかな乾杯のご発声となりました。

祝賀パーティには出捐会社である協和発酵工業(株)の研究所からも多数の研究者が出席し、活発なディスカッションや情報交換が繰り広げられ、助成受領者を含めた研究者同士の重要な交流の場としても実りあるパーティとなりました。

盛会の中、中締め時刻も近づき、森謙治理事より、「協和発酵社員の汗水による努力の賜物が助成金として皆様の研究をサポートしていることを心にとめて、世界的に著名になられた先達のように今回の受賞者の皆様も将来著名なサイエンティストとしてご活躍されると信じております」という励ましのお言葉を頂戴し、閉会となりました。

4. 第22回加藤記念公開シンポジウム

第22回加藤記念公開シンポジウムは、平成17年10月15日(土)13時から例年どおり経団連ホール(経団連会館)にて開催された。

(1) 開催にあたって

i. テーマ選定の経緯

近年、花粉の大飛散により多くの患者さんが苦しまれる状況の中、内閣府に設置された総合科学技術会議のもとで、平成17年1月には「花粉症対策研究検討会(主催者岸本忠三総合科学技術会議議員)」が発足し、内閣府、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、環境省、気象庁の省庁連携の下、国を挙げての対策が推進されることになった。

このような背景の下、オーガナイザーを理化学研究所 免疫・アレルギー科学総合研究センター長の谷口克先生と福井大学医学部教授の藤枝重治先生にお願いし、また、主務官庁の文部科学省、日本アレルギー学会、日本耳鼻咽喉科学会、日本薬学会の御後援を頂き、花粉症の発症、免疫、予防、治療などさまざまな側面からその最前線を「スギ花粉症—機序解明から新しい治療へ—」というテーマで、本シンポジウムを企画した。

ii. シンポジウムの進行状況

最初に、当財団の平田正理事長から、「花粉症は戦後にはじめて報告された疾患とされています。1960年代から僅か40年間で花粉症は激増し、現在日本人の約20%、5人に1人が花粉症だといわれています。正に国民病と言われる所以です。本日は、アレルギーや免疫研究の最前線におられます先生方から、患者さんにとっても大いに喜びとなるお話をお伺いできるものと大変楽しみにしています。当財団の公開シンポジウムには専門家の方々だけではなく、幅広い分野の方々も参加されておられます。本シンポジウムを通じてバイオサイエンスの啓発・普及にいささかなりとも貢献できますならば、当財団の大きな喜びとするところであります。」との挨拶が述べられました。

第1番目の演者である出原賢治先生から、1)アレルギー疾患はアレルゲンの生体内への侵入により引き起こされる局所炎症であり、アレルゲンへの感作は、①抗原提示細胞によるアレルゲンの認識、②抗原提示細胞によるT細胞分化、③T細胞刺激による抗体産生、④IgEの肥満細胞への結合よりなること。2)アレルギー反応は即時型過敏症の代表であり、①即時相反応と、②遅延相反応よりなっていること。3)アレルギー疾患に関連する要因として、①遺伝的要因と、②環境要因について、お話がありました。

第2番目の演者である中山俊憲先生は、アレルギー性気道炎症の制御メカニズムに関する最

新の研究成果と、Th1/Th2細胞バランスのコントロールによるスギ花粉症の治療法の開発の理論的根拠・将来展望について話されました。

第3番目の演者である玉利真由美先生は、アレルギーを起こしやすい体質と環境について、まず、①遺伝要因としては、自然免疫関連遺伝子多型に着目し、SNPを利用した疾患関連遺伝子の同定法の紹介とその方法を利用した系統的な解析結果について話され、②環境要因としては、特に衛生環境が整備された国や地域でのアレルギー疾患の増加は大腸に共生する細菌の影響かもしれない、という衛生仮説を紹介されました。

第4番目の演者であり、オーガナイザーである谷口克先生は、自然免疫系を介する花粉症制御について、予防接種として使用されてきたBCGを用いてアレルギー制御機構を解析し、BCGはNKT細胞を介してB細胞に直接的に働いてIgE抗体産生を抑制する機能があったことなど、アレルギー予防治療につながる研究成果について話されました。

第5番目の演者であり、オーガナイザーである藤枝重治先生は、医師という立場から、現在の標準的スギ花粉症の治療法として減感作療法について紹介され、皮下注射法に代わる舌下療法の有効性を話されました。また減感作療法で使用されるアレルゲンワクチンの作用メカニズムを解析され、スギ花粉に対する多重ペプチド療法について検討中であること等話されました。

スギ花粉症で悩む多くの患者にとり、支障のない日常生活を送ることが出来る治療法・予防薬の開発が近づいていることを期待させる講演会でした。

(2) 講演プログラム

第22回加藤記念バイオサイエンス研究振興財団公開シンポジウム

テーマ：「スギ花粉症－機序解明から新しい治療へ－」

日時：平成17年10月15日(土) 13:00～18:00

会場：経団連会館14F経団連ホール

東京都千代田区大手町1-9-4、電話:03-3479-1411

主催：(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

後援：文部科学省・日本アレルギー学会・日本耳鼻咽喉科学会・日本薬学会

オーガナイザー：

谷口 克(理化学研究所免疫・アレルギー科学総合研究センター長)

藤枝 重治(福井大学医学部教授)

プログラム

開会の挨拶

平田 正 財団理事長

はじめに

谷口 克 理化学研究所免疫・アレルギー科学総合研究センター長

①「どのようにしてアレルギー疾患が起こるのか」

—アレルギー疾患とTh2型免疫反応—

出原 賢治 佐賀大学医学部教授

②「どのようにしてスギ花粉症になるのか」

—I型アレルギー発症制御機構の解析と気道炎症—

中山 俊憲 千葉大学大学院医学研究科教授

③「アレルギーをおこしやすい体質と環境」

—自然免疫関連遺伝子多型とアレルギー疾患—

玉利真由美 理化学研究所遺伝子多型研究センター チームリーダー

④「BCGによるスギ花粉症治療メカニズム」

—自然免疫系を介する花粉症制御—

谷口 克 理化学研究所免疫・アレルギー科学総合研究センター長

⑤「どのようにして花粉症を治すのか」

—花粉症に対するこれまでの治療と新しい治療法—

藤枝 重治 福井大学医学部教授

まとめ

藤枝 重治 福井大学医学部教授

5. スナップ写真

(1) 第22回公開シンポジウム



挨拶する平田 正 理事長



会場風景

スギ花粉症
機序解明から新しい治療へ
加藤記念バイオサイエンス研究新興財団 第22回公開シンポジウム

2005年
10月15日
13時～18時
経団連会館ホール
東京都千代田区大塚1-9-4

オーガナイザー
理化学研究所
谷口 克
福井大学
藤枝重治

幹事の挨拶 平田 正 (加藤理事長)
はじめに 谷口 克 (理化学研究所免疫アレルギー科特任研究員センター長)

出原 賢治 福井大学医学部 教授
どのようにしてアレルギー疾患が起こるのか
アレルギー疾患とTh2型免疫反応

中山 俊憲 平塚大学大学院理学部 教授
どのようにしてスギ花粉症になるのか
アレルギー免疫調節機構の解析と気道炎症

玉利真由美 理化学研究所免疫アレルギー科特任研究員センター
アレルギーをおこしやすい体質と環境
自然免疫関連遺伝子多型とアレルギー疾患

谷口 克 理化学研究所 免疫アレルギー科特任研究員センター長
SCCによるスギ花粉症治療メカニズム
自然免疫系を介する花粉症制御

藤枝 重治 福井大学医学部 教授
どのようにしてスギ花粉症を治すのか
花粉症に対するこれまでの治療と新しい治療法

まとめ 藤枝 重治 福井大学医学部 教授

特別申込
氏名、住所(〒番号)、所属、電話番号を
郵送の上、郵送、ファックスまたはメール
にてお申し込み下さい。
申し込み期限は9月15日です。
申し込み料400円に申し込み票が返ります。
申込み期：9月17日(日)9時(正)
申込先：加藤記念バイオサイエンス研究新興財団
〒104-8533 東京都中央区新富1-9-0
電話 FAX: 03-6279-2578
E-mail: kato.jstnar@kyowa.co.jp

主催：
幹事団長 加藤記念バイオサイエンス研究新興財団
後援：
文部科学省
日本アレルギー学会
日本耳鼻咽喉科学会
日本眼科学会

《演者》

ポスター



座長の谷口・藤枝両先生



谷口 克 先生



出原賢治 先生



中山俊憲 先生



玉利真由美 先生



藤枝重治 先生

《会場とロビーでのディスカッション風景》



《懇親会風景》



(2) 第17回研究助成贈呈式

《贈呈式風景》

第17回 加藤記念研究助成 贈呈式



平田 正 理事長



長澤寛道 選考委員長



文部科学省 松尾泰樹 課長



木下祝郎 博士(名誉会長)



早石 修 博士(名誉理事)



第17回研究助成受領者と財団関係者

《研究計画発表風景》



《祝賀パーティー風景》



挨拶される協和発酵工業(株)松田 譲 社長



乾杯の挨拶をされる
小田鈞一郎 理事



6. 平成17年度収支決算報告

収 支 計 算 書

平成 17 年4月1日～平成 18 年3月 31 日

単位:円

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
I 収入の部				
1 基本財産運用収入	3,150,000	3,161,932	△ 11,932	
2 運用財産運用収入	10,000	8,667	1,333	
3 運用財産収入	72,000,000	72,000,000	0	
当期収入合計 (A)	75,160,000	75,170,599	△ 10,599	
前期繰越収支差額	18,130,000	18,133,377	△ 3,377	
収入合計(B)	93,290,000	93,303,976	△ 13,976	
II 支出の部				
1 事業費	69,000,000	68,287,117	712,883	
研究助成	44,000,000	46,000,000	△ 2,000,000	
国際交流助成	7,500,000	7,400,000	100,000	
普及啓発費	8,000,000	5,134,511	2,865,489	
事業促進費	8,000,000	8,620,370	△ 620,370	
年報出版費	1,500,000	1,132,236	367,764	
2 管理費	9,800,000	9,203,400	596,600	
会議費	1,000,000	1,135,201	△ 135,201	
旅費交通費	4,000,000	3,593,628	406,372	
人件費	3,600,000	3,600,000	0	
什器備品費	200,000	0	200,000	
通信費・消耗品費等	1,000,000	874,571	125,429	
3 予備費	500,000	0	500,000	
当期支出合計(C)	79,300,000	77,490,517	1,809,483	
当期収支差額(A)-(C)	△ 4,140,000	△ 2,319,918	△ 1,820,082	
次期繰越収支差額(B)-(C)	13,990,000	15,813,459	△ 1,823,459	

II 平成18年度事業計画

平成18年度の事業計画は、平成18年2月3日(金)開催の第35回理事会・評議員会にて審議の上、承認された。主要事業は次の通りである。

1. 助成事業

(1) 第18回加藤記念研究助成

① 助成対象研究者

- ▶ メディカルサイエンス「研究助成」はAグループの研究機関に属する研究者。
- ▶ バイオテクノロジー「研究助成」はA及びBグループの研究機関に属する研究者。
- ▶ 「奨励研究助成」はA及びBグループの研究機関に属する研究者

② 助成金額: 合計4,400万円

- ▶ メディカルサイエンス「研究助成」は1件200万円。
- ▶ バイオテクノロジー「研究助成」は1件200万円。
- ▶ 「奨励研究助成」は1件100万円。

③ 推薦者: 理事・評議員又は申請者の所属する機関の長(財団指定の研究機関)

④ 応募期間: 平成18年6月初旬～9月30日

⑤ 選考委員会: 平成18年12月

⑥ 助成金の贈呈式: 平成19年3月2日(金)予定。

(2) 第18回加藤記念国際交流助成

① 助成対象者: 公募

② 助成金額: 前期580万円 後期170万円

③ 推薦者: 申請者の所属する機関の長

④ 募集期間: 前期 平成18年4月～5月末(4月～9月までの学会対象) 後期 平成18年4月～8月末(10月～翌年3月までの学会対象)

⑤ 選考委員会: 前期 平成18年6月 後期 平成18年9月

(3) 第17回学会等の開催助成

① 募集方法: 非公募で理事・評議員の推薦による。

② 助成金額: 120万円(1件20万円程度、6件程度)

2. 平成18年度事業予算

平成18年度収支予算書

平成18年4月1日～至平成19年3月31日

単位:円

科目	平成18年度 予算額	平成17年度 予算額	差異	備考
収入の部				
基本財産運用収入	3,150,000	3,150,000	0	基本財産の運用
運用財産運用収入	10,000	10,000	0	運用財産の運用
運用財産収入	72,000,000	72,000,000	0	
基本財産収入	0	0	0	
当期収入合計 A	75,160,000	75,160,000	0	
前期繰越し収支差額	13,990,000	18,130,000	-4,140,000	
収入の部合計B	89,150,000	93,290,000	-4,140,000	
支出の部				
1、事業費				
研究助成	44,000,000	44,000,000	0	
国際交流助成	7,500,000	7,500,000	0	
普及啓発等	3,000,000	8,000,000	-5,000,000	学会開催助成、普及啓発調査等
年報出版費	1,500,000	1,500,000	0	
事業促進費	8,500,000	8,000,000	500,000	選考委員会及び贈呈式費用
事業費合計	64,500,000	69,000,000	-4,500,000	
1、管理費				
会議費	1,500,000	1,000,000	500,000	理事・評議員会開催費、記念事業調査
旅費交通費	4,000,000	4,000,000	0	役員及び事務局旅費
人件費	3,600,000	3,600,000	0	財団分担金
什器備品費	200,000	200,000	0	
通信費、消耗品費等	1,000,000	1,000,000	0	印刷費等諸費用
管理費合計	10,300,000	9,800,000	500,000	
基本財産繰入支出	0	0	0	
予備費	500,000	500,000	0	
当期支出合計 C	75,300,000	79,300,000	-4,000,000	
当期収支差額 A-C	-140,000	-4,140,000	4,000,000	
次期繰越し収支差額B-C	13,850,000	13,990,000	-140,000	

Ⅲ. 助成金受領者からの報告

1. 研究助成

当財団では、研究助成金受領から3年後に助成対象となった研究の成果報告を受けることになっている。以下に第15回(平成15年度)の研究助成金受領者からの報告を掲載した。

なお、この研究報告内容は民間助成研究成果データベースに収録のため国立情報研究所に提供されている。

(1) 第15回研究報告

- 1) 新たな免疫制御法確立のための基礎研究
石戸 聡((独)理化学研究所感染免疫応答研究チーム) 28
- 2) ALK5 knock-in マウスを用いた TGF- β による血管新生制御機構の解明
伊東 進(筑波大学人間総合科学研究科) 29
- 3) 抗酸化酵素 PHGPx 欠損による不妊症発症機構の解析
今井 浩孝(北里大学薬学部衛生化学教室) 30
- 4) 多数の生物分子モーターが非線型相互作用することでおこるマクロな滑り運動の創発
今福 泰浩(九州大学大学院理学研究院) 31
- 5) 細胞機能を負に制御する新しい細胞間シグナル伝達機構「CD47-SHPS-1系」
岡澤 秀樹(群馬大学生体調節研究所付属生理活性物質センター) 32
- 6) シアノバクテリア由来天然物によるプロテオリシスコントロール
沖野 龍文(北海道大学大学院地球環境科学研究院) 33
- 7) バイオミメティックスによる分子認識超分子の創製
鬼村 謙二郎(山口大学工学部応用化学工学科) 35
- 8) ゼブラフィッシュを用いた造血発生を制御する新規因子の検索
川原 敦雄(京都大学大学院医学研究科) 36
- 9) エネルギー平衡調節の神経基盤－視床下部メラノコルチン・ニューロペプチドY系
の神経形態学的解析－
岸 敏郎(島根大学医学部解剖学講座) 37
- 10) ミトコンドリアにコードされる雄性配偶子致死タンパク質の機能解析
久保 友彦(北海道大学大学院農学研究院) 38
- 11) 癌分子標的としてのテロメア長制御機構
清宮 啓之((財)癌研究会癌化学療法センター分子生物治療研究部) 39

12) 繊維状ファージを用いた非レトロウイルス・ベクターの開発 世良 貴史(京都大学大学院工学研究科)	40
13) インテグリン細胞外領域の高分解能電顕による可視化 高木 淳一(大阪大学蛋白質研究所プロテオミクス総合研究センター)	41
14) 人工的抗原提示細胞を用いた慢性ウイルス感染症における免疫反応の解析 外丸 詩野(北海道大学大学院医学研究科)	42
15) ミトコンドリア由来活性酸素制御による糖尿病合併症発症・進展の阻止 西川 武志(熊本大学大学院医学薬学研究部)	44
16) ニトリル代謝系のタンパク質および遺伝子の機能解析 橋本 義輝(筑波大学大学院生命環境科学研究科)	45
17) 後期エンドソーム/多胞体様構造(MVB)における膜蛋白質選別輸送機構の解明 藤田 英明(九州大学薬学研究院細胞生物薬学分野)	46
18) エンドサイトーシス過程における特異的リン脂質ドメインの機能および 膜融合調節機構の解析 松尾 浩民(就実大学薬学部医療薬学科)	47
19) 海洋性珪藻における CO ₂ センシングの分子機構 松田 祐介(関西学院大学理工学部生命科学科)	48
20) 大脳皮質-視床投射のシナプス解析 宮田 麻理子(自然科学研究機構生理学研究所 神経シグナル研究部門)	50
21) 新規 IL-6標的遺伝子の心筋リモデリングにおける役割の解明と治療への応用 安川 秀雄(久留米大学循環器病研究所)	52
22) 高等植物におけるシグナル伝達系のネットワーク解析 柳澤 修一(東京大学大学院農学生命科学研究科)	53
23) Activin 応答性の膵β細胞分化シグナルの解明 綿田 裕孝(順天堂大学内科学代謝内分泌学)	54

第11回研究報告

1) サイトカインシグナルを分子基盤とした神経幹細胞の運命付け制御機構の解明 田賀 哲也(熊本大学発生医学研究センター)	55
---	----

2. 国際交流助成

国内で実施された研究の成果を、平成17年4月から18年3月の間に海外で開催された学会等で発表するに際し、当財団の助成(第17回国際交流助成)を受けた研究者からの学会等参加報告を以下に記載した。

学会発表報告

前期

- 1) ヨーロッパ松果体・生物リズム学会第10回大会
東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻 浅岡 洋一 59
- 2) ヨーロッパ麻酔学会年次大会
京都府立医科大学麻酔学教室 上野 博司 60
- 3) 第20回国際結晶学会
京都大学原子炉実験所 梅名 泰史 61
- 4) 欧州内分泌学会
東京大学大学院医学系研究科循環器内科 大石由美子 62
- 5) 米国消化器病週間
九州大学大学院医学研究院病態機能内科学 緒方 久修 63
- 6) 米国核医学会年次大会
金沢大学学際科学実験センター 小川 数馬 64
- 7) ヨーロッパにおける年輪年代学、気候学に関係した国際会議
(独)森林総合研究所組織材質研究室 香川 聡 65
- 8) 国際心臓研究会
国立循環器病センター研究所循環分子生理部 片野坂友紀 66
- 9) 第2回植物・微生物の環境と代謝の生化学に関する国際ワークショップ
北九州市立大学大学院国際環境工学研究科 角野 貴志 67
- 10) ヨーロッパ研究皮膚科学会第35回年次総会
京都大学大学院医学研究科皮膚生命科学講座 金澤 伸雄 69
- 11) 植物生物学会2005
食品総合研究所食品工学部電磁波情報工学研究室 金森 紀仁 70
- 12) インターサイエンス化学療法学会
東邦大学医学部微生物・感染症学講座 木村聡一郎 71
- 13) 米国微生物学会年次大会
筑波大学大学院人間総合科学研究科 黒田 誠 72

14) 第15回国際発生生物学会	
静岡大学教育学部理科教育講座 黒田 裕樹	73
15) 細胞性粘菌国際会議2005	
東北大学大学院生命科学研究科生命機能科学専攻 佐々木和教	74
16) 日米菌学会合同大会	
京都大学生存圏研究所バイオマス変換分野 月原多佳久	75
17) 北米核医学会年次大会	
明治鍼灸大学 堂上 友紀	76
18) アメリカ糖尿病学会年次大会	
京都大学医学部付属病院腎臓内科 松原 雄	77
19) 2005年コールド・スプリング・ハーバー研究所主催・真核生物DNA複製会議	
神戸学院大学栄養学部 水品 善之	78
20) コケ植物の発生生物学、生理学、分子生物学に関する国際会議	
広島大学大学院理学研究科 森岡(榊原)恵子	80
21) 第18回複合糖質国際シンポジウム	
北海道大学大学院生命科学院 吉村 弥生	81
22) 第12回生物無機化学国際会議	
自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター 吉岡 資郎	82
後期	
1) 第35回北米神経科学学会	
慶応義塾大学医学部薬理学教室 金蔵 孝介	83
2) 50回米国生物物理学会年会	
東京医科歯科大学難治疾患研究所生体情報薬理学分野 黒川 洵子	85
3) 第35回北米神経科学学会	
宮崎大学医学部解剖学講座 近藤 慎一	86
4) 第35回北米神経科学学会	
徳島文理大学香川薬学部 定本 久世	87
5) 2005 環太平洋国際化学会議	
名古屋工業大学大学院工学研究科 柴田 幹大	88
6) 第35回北米神経科学学会	
京都大学大学院医学研究科臨床神経学 松本 理器	89
7) 2005 環太平洋国際化学会議	
九州大学大学院生物資源環境科学府生物機能科学専攻 矢野 知美	90
8) 第35回北米神経科学学会	
慶応義塾大学医学部解剖学教室 山田真吏奈	91

IV. 財団の運営と組織

1. 設立趣意

21世紀に向けて、現代社会が有限な天然資源をもとに繁栄を持続するためには、バイオサイエンス・技術の継続的進歩と、それを活用する関連産業の発展が重要であることは言うまでもありません。

近年における生命科学はゲノムやプロテオーム科学などの先端技術や、それを駆使した細胞レベルの研究分野で日々激しい競争が展開されており、その進歩は目覚ましいものがあります。近い将来、わが国の研究がこれらの新しい分野で飛躍的な進歩を達成しうるならば、それは国内の社会経済の発展にも大きく貢献できるものと信じます。そのために、科学技術基本計画に基づき、総合的見地から国を挙げての各種生命科学の研究振興と人材育成が課題であり、その過程で生まれた創造的発明の早急な実用化が望まれます。また一方で、真に価値ある先駆的研究は、個性的で創造性豊かな研究者により、また既存の制約を超えた研究環境下で、粘り強い努力から生み出されるものと期待されます。

このような認識から、本財団はバイオサイエンスの分野で有能な研究者を全国に発掘し、その創造的研究に対して資金的支援を継続することは極めて有意義であるとし、財団設立以来微力ながらも研究の資金助成および国際交流、研究集会などの助成を鋭意続けてまいりました。さらには公開シンポジウムによるバイオサイエンスの啓蒙も重要な活動となっております。これらはわが国のバイオサイエンス研究が一日も早く世界的最高水準に達することを願っていたことであります。

協和発酵工業株式会社は、バイオテクノロジーと有機合成化学などの技術を基盤に広く産業活動を展開しております。同社の創設者である加藤辨三郎は企業活動の発展をめざすと共に科学技術の振興によって社会の発展と人類の福祉への貢献を同社の経営理念としておりました。加藤翁は昭和58（1983）年8月に永眠いたしました。40年余におよぶ会社経営の他に、わが国の多くの科学技術委員会などに関与した体験を通してバイオサイエンス振興の一層の必要性を強調いたしておりました。

こうした加藤翁の遺志を生かし、また総合的で領域横断的観点からバイオサイエンス研究振興の重要性を認識した協和発酵工業株式会社は、同社の創立40周年の記念事業として、昭和63（1988）年12月、財団法人加藤記念バイオサイエンス研究振興財団を設立いたしました。

2. 目的（寄附行為第3条）

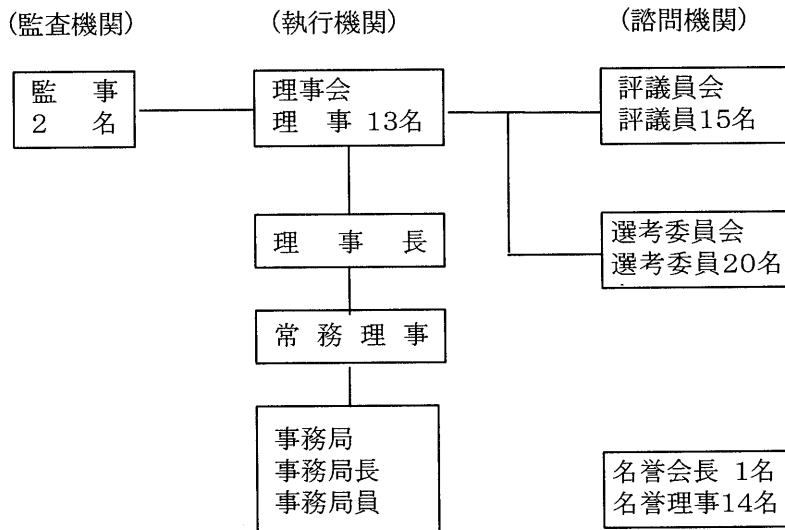
この法人は、バイオサイエンスの分野における研究者に対する助成ならびにシンポジウム・研究会の開催・助成を行なうことにより、科学技術の振興をはかり、もって社会経済の発展に寄与することを目的とする。

3. 事業（寄附行為第4条）

この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。

- (1) バイオサイエンスおよびこれに関連する分野における研究者に対する助成
- (2) バイオサイエンスおよびこれに関する分野における研究者の国際交流の助成
- (3) バイオサイエンスおよびこれに関する分野におけるシンポジウム・研究会の開催および助成
- (4) その他目的を達成するために必要な事業

4. 組織



(平成18年4月30日現在)

5. 財団の概要

名 称	財団法人 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 Kato Memorial Bioscience Foundation
設立許可日	1988年12月23日
主務官庁	文部科学省
特定公益増進法人許可	2005年11月25日更新
基本財産	7億6百万円
出 捐 者	協和発酵工業株式会社

事業内容

1. 研究助成

助成対象	バイオサイエンスの基礎分野において、独創的且つ先駆的研究をめざす国内の若手研究者。但し、学生、大学院生、本助成金を受領後3年を経ない研究者および当財団の選考委員と同一研究室に所属する研究者は対象外とします。
助成対象 研究と 応募年齢	「研究助成」 バイオサイエンス研究分野を、①“メディカルサイエンス分野”と、②“バイオテクノロジー分野”に区分して募集します。応募年齢は男性は40歳以下、女性は45歳以下を対象とします(応募期限9月30日現在満年齢)。 「奨励研究助成」 バイオテクノロジー分野において領域を指定して募集します。応募年齢は男性は35歳以下、女性は40歳以下とします(同上)。
募集方法	財団指定の研究機関へ推薦依頼。当財団所定の申込書に必要事項をご記入の上、所定の推薦書を添えて当財団へ申し込んで下さい。
募集期間	6月上旬より募集を開始し、9月30日を応募締切とします。
助成金 交付時期	3月31日までに交付します。

2. 国際交流助成

助成対象	海外で開催されるバイオサイエンス分野の学会、シンポジウムに発表予定の35歳（医歯学系卒業者は37歳）までの国内の若手研究者。
募集方法	公募によります。当財団所定の申込書に必要事項をご記入の上、当財団へ直接申し込んで下さい。

募集期間

前期：4月1日～9月30日の期間に発表される方は、4月1日～5月31日とします。

後期：10月1日～翌年3月31日の期間に発表される方は、4月1日から8月31日とします。

**助成金
交付時期**

前期：6月～7月中

後期：9月～10月中

(注) 上記1および2の詳細は財団ホームページをご参照下さい。

URL:<http://www.kyowa.co.jp/csr/community/kato/index.html>

3. 学会等開催助成

助成対象

バイオサイエンス分野の学会、シンポジウム等の開催費用の助成。但し、原則として1,000人以下の規模を対象とします。

募集方法

非公募で、当財団理事または評議員の推薦によります。

4. 公開シンポジウムの開催

バイオサイエンス分野における話題性のあるテーマについて、当財団主催で開催します。

5. その他、財団の目的を達成するために必要な事業

6. 平成18年度財団役員等

理事長	平田 正	協和発酵工業(株) 相談役	
常務理事	土井内 徹	協和発酵工業(株) 顧問	
理事	伊藤正男	東京大学名誉教授 (独)理化学研究所脳科学総合研究センター特別顧問	
	大塚栄子	北海道大学名誉教授 北海道大学監事	
	大村 智	(社)北里研究所理事・所長	
	岡田吉美	東京大学名誉教授	
	小田鈎一郎	東京理科大学基礎工学部嘱託教授	
	折茂 肇	健康科学大学学長	
	香川靖雄	自治医科大学名誉教授 女子栄養大学副学長	
	岸本忠三	総合科学技術会議議員 大阪大学生命機能研究科客員教授	
	高久史麿	東京大学名誉教授 自治医科大学学長	
	別府輝彦	東京大学名誉教授 日本大学大学院総合科学研究所教授	
	森 謙治	東京大学名誉教授 (独)理化学研究所免疫・アレルギー科学総合研究センター研究顧問	
	監事	伊藤 醇	公認会計士
		樋口節夫	公認会計士 中央青山監査法人代表社員
評議員	小川秀興	順天堂大学学長	
	垣添忠生	国立がんセンター総長	
	勝木元也	自然科学研究機構理事・基礎生物学研究所所長	
	北原 武	東京大学名誉教授 (社)北里研究所基礎研究所部長 帝京平成大学薬学部教授	
	木村 光	京都大学名誉教授 (株)グリーンバイオ代表取締役	
	郷 通子	お茶の水女子大学学長	
	榊 佳之	(独)理化学研究所ゲノム科学総合研究センターセンター長	
	谷口維紹	東京大学大学院医学系研究科教授	
	鶴尾 隆	(財)癌研究会・癌化学療法センター所長	
	中野洋文	協和発酵工業(株) リサーチフェロー	
	永井良三	東京大学大学院医学系研究科教授	
	長田重一	大阪大学大学院生命機能研究科教授	
	西川伸一	(独)理化学研究所発生・再生科学総合研究センター副センター長	
	三品昌美	東京大学大学院医学系研究科教授	
	柳田敏雄	大阪大学大学院生命機能研究科教授	

選考委員長	長澤寛道	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
副選考委員長	山本一彦	東京大学大学院医学系研究科教授
選考委員	秋山徹	東京大学分子細胞生物学研究所教授
	審良静男	大阪大学微生物病研究所教授
	新井洋由	東京大学大学院薬学系研究科教授
	内海成	京都大学大学院農学研究科教授
	江崎信芳	京都大学化学研究所教授
	門脇孝	東京大学大学院医学系研究科教授
	久保田紀久枝	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科教授
	五味勝也	東北大学大学院農学研究科教授
	住本英樹	九州大学生体防御医学研究所教授
	関水久	東京大学大学院薬学系研究科教授
	瀬原淳子	京都大学再生医科学研究科教授
	難波啓一	大阪大学大学院生命機能研究科教授
	西田栄介	京都大学大学院生命科学研究科教授
	福山透	東京大学大学院薬学系研究科教授
	水澤英洋	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授
	山田信博	筑波大学大学院人間総合科学研究科教授
	吉田稔	(独)理化学研究所主任研究員
	依田幸司	東京大学大学院農学生命科学研究科教授

名 誉 職

名 誉 会 長	木下祝郎	協和発酵工業(株)元会長
名 誉 理 事	池原森男	大阪大学名誉教授 (株)生物分子工学研究所嘱託
	井上一郎	東京工業大学名誉教授
	大澤利昭	東京大学名誉教授 東京薬科大学学長
	小関治男	京都大学名誉教授
	清水喜八郎	(社)北里研究所顧問
	白砂信善	公認会計士
	菅野晴夫	(財)癌研究会顧問
	早石修	京都大学名誉教授 (財)大阪バイオサイエンス研究所理事長
	藤巻正生	東京大学名誉教授 お茶の水女子大学名誉教授 (財)食生活研究会理事長
	中嶋暉躬	東京大学名誉教授 星薬科大学学長

中村寛之助 協和発酵工業(株)元会長
松井正直 東京大学名誉教授
水野傳一 東京大学名誉教授
山田秀明 京都大学名誉教授 富山県立大学名誉教授

事務局

事務局長 落合恵子

(平成18年4月30日現在)

編集後記（財団年報 2005）

平成18年度の事業がスタートして早や3ヶ月が過ぎ、財団年報の発刊の時期を迎えました。平成17年度は、常務理事(4月)と事務局長(10月)が相次いで交代となり、事務局運営の責任の重圧の中、科学技術の利器・PCで電子化された情報管理のおかげで、無事今日に至っております。

さて、平成18年度事業計画のページをご覧になってお気づきの事と思いますが、平成18年度事業の実施にあたって特に2つの改革を行うこととなりました。1つは、理事長の巻頭言にもあるように、研究助成事業の大幅な見直しを行ったところです。主な内容はバイオテクノロジー分野における研究並びに女性研究者の支援を充実・強化したところです。本年6月初旬の募集開始に間に合わせるべく、募集要項の改訂は、国立大学の法人化などの研究機関の機構改革にあわせて財団指定の約500研究機関の施設の見直しも含め大変な作業となりました。ほっと一息つきたいところですが、9月末の応募締切りにて応募数がどれ位になるか気掛かりな心境でもあります。

もう1つは、22回まで続いた公開シンポジウムを中断し、20周年(平成20年12月)の記念事業とからめて新規事業を検討することとなりました。

また、公益法人制度改革関連3法案が平成18年6月2日に公布され平成20年から施行されることが決定しました。新しい公益法人への移行に際し、公益認定基準に基づくチェックを受けることとなり、「寄付行為」から「定款」への改定をはじめとして、今後制定される政省令や条文を十分に理解した上での対策・対応が必要となってきます。

このように、事務局として内外ともに変革の時期をむかえる中で、財団の理念にふさわしい社会貢献活動を継続していくにあたり、改めて皆様方のご指導とご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

2006年7月 落合恵子 記

(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団
財団年報第7号(平成17年度)

Annual Report of Kato Memorial Bioscience Foundation
Vol.7 (2005)

発行日 2006年8月1日
発行者 理事長 平田 正
編集者 常務理事 土井内 徹
事務局長 落合 恵子
発行所 財団法人 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団
〒194-8533 東京都町田市旭町3-6-6
電話・ファックス：042-725-2576
印刷 真友工芸株式会社
〒108-0014 東京都港区芝4-18-9 長尾ビル

